序

奈良国立文化財研究所が薬師寺の発掘調査を初めて行ったのは，昭和二十九年であった。それ以前の昭和九年に日本古文化研究所による西塔跡の発掘があるが，当時は発掘といっても遺跡面の清掃程度に止まる状態であったので，伽藍究明へ本格的なメスを入れた最初の調査といってよい。爾来薬師寺では収蔵庫建設を手始めに，金堂再建とそれに引続く西塔，東・西僧房，中門・回廊の復興など，伽藍の復原整備事業が進められるなかで，その事前調査を継続して当研究所が担当してきた。伽藍の復原には発掘調査による建物の規模・形式の確認が不可欠だからである。その結果今日まで薬師寺における発掘面積は延べ 13,120 m^2 に達し，当研究所が行った数多くの寺院の発掘調査のうちでも，最も規模が大きくまた期間も長いものとなった。その間に伽藍主要部についてはほゞ解明をおわり，古代寺院の研究に大きく寄与する成果をあげたものと信じている。実は伽藍の復興計画は現在も進行中であり，そのための発掘調査もなお次々に行う必要に迫られている。この報告書もかなり以前に企画されたのであったが，発掘するたびに新しい発見が生れ，それを少しでも取り込みたいということで遅れおくれになった。そのため今回は昭和六十年春までに行った発掘調査の結果をまとめ，一応の区切りとした。なお未解決の問題も多く，それらは今後の発掘調査

等での解明が期待される。

今回収録した報告のなかでは霊亀二年の木簡や単廊の検出が，平城京薬師寺の造営事情とからんで注目される。本簡は『日本書紀』の記事に先立って造営工事が開始されていたことを示唆するし，中心部を取囲む回廊が単廊として計画されながら途中で複廊に変更されたのは，原型となった藤原京薬師寺を生んだ白鳳文化と平城京における天平文化との質的な相違を物語るものと思われる。また僧房の発掘では建物の規模・構造ばかりでなく，出土品によって天禄四年（973）火災時の僧房内での生活の様相まで明らかにし得たのは，貴重な発見であった。

薬師寺の発掘調査は長期間にわたったため，直接発掘にたずさわった人と報告書報筆者とが異る部分が少なくない。それらはできるだけ意見をうかがい，議論を重ねていただいたが，今後の検討でさらに異なった解釈を生じる余地もある。また仏像関係の報告は研究所外の方々にお願いした。本報告書をまとめるに当って発掘，出土品整理，資料収集などにたずさわった多くの人々，それを応援して下さった薬師寺当局をはじめとする多数の部外の方々に，改めて感謝の意を表したい。

昭和六十二年一月

奈良国立文化財研究所長

鈴　木　嘉　吉